

小品「安心」と感興

澤田雅弘
Masahiro Sawada

安心（心を安んず）の二字の草稿をはじめて作ったのは、平成元年のことである。当時、馬王堆帛書の結構がたいそう新鮮に目に映って、これをヒントにいくつもノートに鉛筆でラフを作っていた。この二字はその当時のノートに挟んであるメモ用紙上にあつたが、これまで一度も筆を執って試みたことがない。

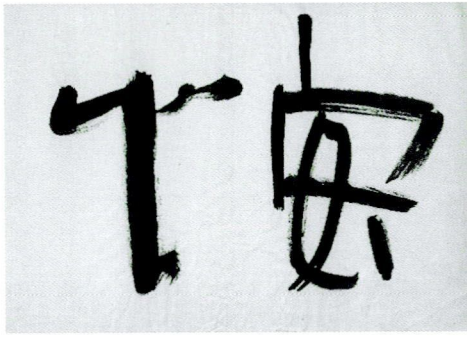
布置を真つ先に計算する「構図」あるいは「紙面構成」といった概念は、作り物になるとの懸念を覚えてから、いまでは極力念頭におかないことにしているが、三十年ほど前の一時期には、布置を強く意識していた時期があつて、当時の草稿には、馬王堆帛書各本の結構にヒントを得たと思しきラフが紙面を埋めている。当時のラフの安心二字は、結構の視点では今回仕上げた作と大差はないが、完成形はもっとモダンなイメージで、正方形の紙面に、「安」のウ冠の横線と「心」の全画の始筆を横一列に並べ、「安」は首筆だけが上方高くから直下し、「心」の方は長脚だけを正反対に長く下垂す

るものであつた。ちょうど「上下」二字を横線を並べて布置した姿に似ている。しかし、これまで一度も筆を執って試みなかったのは、たぶん感興が湧かなかつたのだと思う。ところが今回ふとした瞬間に「安心」の二字を書いてみたい衝動にかられた。

例年のとおり、年一度の書作日を夏季に確保した。学生たちの書展の賛助出品を中心に例年小品を五、六点仕上げる必要があるためである。その二日前、教学事務のひとつを片付けて、数か月前に届いた『里耶秦簡第二卷』を四、五時間眺めた。その後、草稿を書きなぐつてあるノートを練りながら、学生に向ける字句で感興の湧くものを二十ほど絞り込もうと臨んだが、感銘がよみがえるのはその一割もあるかどうかである。そこで改めて書棚から論語やら清言やら、目に留まった数冊を取り出しては拾い読みを始める。このような調子であるから、草稿を作る段にはなかなかたどり着かない。ようやく字句を選出しおわって、それぞれを鉛筆やボールペンでざっ

と書いて、気持ちよく書けそうなものを二十ほどを貯めた。その中から何を選ぶかは、筆を執る際の思いに任せた。いつもこうして草稿とはいいがたいラフだけが蓄積する。そのときまだ「安心」の二字は、二十ほどのラフに含まれていなかった。

初日の午前中は、手ならしと記憶の回復のために臨書をして過ごした。午後はラフの草稿を眺めながら、書跡の影印本や字典を紐解き、運筆の迷いの解消を目的に、半紙に試し書きをはじめると、気持ちが向いたものが二つ三つと生まれる。こうなると書きたい衝動を抑えきれなくなつて、草稿を精しくすることは到底できず、にわか筆を執つて書き出す。いつものことである。



なるべく書き込まないようにと自制しながら、一、二枚書いては無理に休みを入れる。これを繰り返して、初日は一点を仕上げた。二日目は三点仕上げて、筆を洗おうかというとき、「安心」の二字が突然思い浮かんで、墨池の代わりにしているタッパーに水を加えて、内壁にこびりついている墨の雫を筆で溶き、半紙で一枚書いて

みた。挿図がそれである。すぐにできると思った。逸る気持ちを抑え込んで明日に備えた。

明朝、とりあえず反切を六等分にして一枚書いた。書けたと思つた。しかし、乾かしてみると、「心」の長画の長さが余計に過ぎるように見え、縦幅を縮め反切八等分にして二枚書いた。その一枚を見て、「心」はもつと渴筆にして、潤筆との対照を強く印象付けようかという思惑が掠めたが、すぐにかき消した。自然でいい。墨は故意に減らすまい。減らさずとも「心」の長脚で筆鋒は必ず明るく割れると確信し、簡素に書くことだけを自分に言い聞かせた。続げざまに三枚書いて、その中のどれでもいいと思つたところで、「心」の全始筆の位置を、馬王堆帛書老子乙本のように横一列に揃えて書いていることに惑いが起こつた。というのは、「心」の右側两点を縦に並べる秦簡の態が頭をよぎつたからである。しかし、両点を縦に並べたのでは抜がりがなくなるから、その姿態はとれないし、そもそも秦簡であろうと帛書であろうと、その態に拘束される必要はないではないか、そう思い直して、悩みはすぐに吹っ切れた。が、今度は「心」の起筆を横一線に並べて書いているのは、かえつて意図的であるように目に映るのではないかと思われて、右端の一点をすこしだけ落そうと決心して一枚だけ書いた。気持ちよく書けた。躊躇わずに筆を擱いた。その最後の一枚が図に掲げたものである。紙

の皺に筆鋒が当たって「心」の長脚が面白くはなったが、それはむしろ余計な華であるようにも思える。

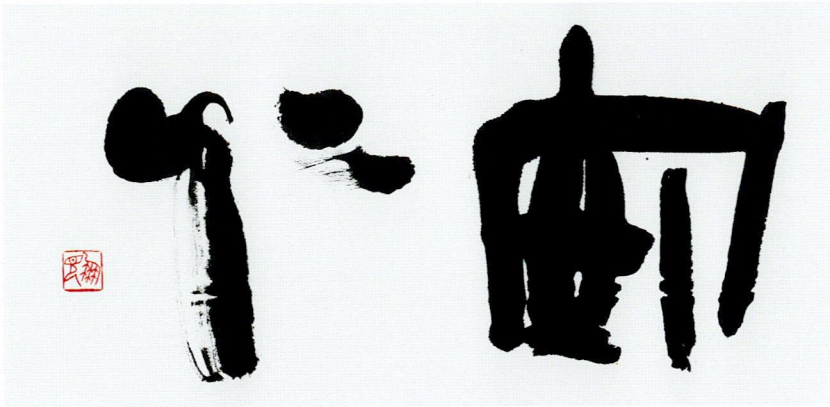
計画を立て腐心し反省を重ねながら幾らか書き込めば、様にはなるが、ふと思いついて書いた作の方が出来がいいような場合がままある。若いころには反故紙の山をだれよりも高く積みながら、なお意を得ずに、もう一山さらに一山と書き込んだが、そうした類はたいてい書き始めの頃か中頃のものがよいことが多い。若いころはそのことをなかなか自覚できなかった。二十歳前、師からは「それ以上書くな」「いったん休め」「日を替えて書け」と幾度も説教された。しかし、もう少しのところまで来ているという思いを断ち切れず、結局書き続けた。いまは師の説くところが身に染みて分かるようになった。が、未練だけは容易には断ち切れず、書き続けたい欲求を、いかに抑制するか、今はこれにいろいろ腐心している。

秦隸に体をとった作はほかに「脩己以敬（己を脩むるに敬を以てす）」「楽亦在其中矣（楽しみは亦其の中に在り）」の小品と、また全紙を横に截った「見幾而作（幾を見て作す）」の計三点を書いた。「脩己以敬」は十五枚ほど書いたように思う。「楽亦在其中矣」は案外でこずって三十枚には登ったと思う。「見幾而作」は十枚ほど書いたところで力みが生じ、これを反省してまた十枚ほど書いたが、今度は行儀よくなりすぎ、翌朝に気分を変え、時間を空けて書いた。

これも三十枚では済まなかった。

感興のままに一枚だけ瀟灑に書いて終われる心境は、どうすれば得られるものか。あるいは生涯到りえないものか、今の私にとって大きな課題である。

使用筆は上海工芸の「蘭蕊羊毫」。竹管の軸先が少し割れて筆毫の腰がわずかばかり崩れている。軸先を白糸で縛って補強してあるのと、かけひもを自己流に埋め込んだ痕跡がないことから、三十五年ほど前に購入していたもの一本だと思う。ほかの同銘筆を使えばよさそうなのだが、頓着がないのか、いったん手にした筆を変えようとは思わない。上述の前二点も同じ筆を使いまわした。墨は呉竹の磨墨液「抱雲」。今では、墨を摩るのは書簡だけになってしまった。紙は台湾画仙紙の「厚口金龍箋」。



安心

17×34cm